

夕さん

物部俊之

夕さん 作 物部俊之

駅前で花を一輪いただいた。

夕刻、茜色の空の下、空気までが赤く染まって見える景色の中で、小学生くらいだろうか、女の子がこれあげると花を一輪、私に差し出したのだった。

これでも、一人暮らし、いや二人暮らしの女であり、会社に勤めて一年、ちょっとばて気味の社会人でもある。子供から何かいただくというのは、大人として、少しは遠慮すべきなのだけれど。夕空に赤く染まったその女の子が、なにやら妙にいとおしく、つい、手を伸ばし、花を一輪受け取ってしまったのだ。

ありがとう、女の子はにっと笑みを浮かべると、きびすを返し、人込みへと消えて行った。

人込み、そして、私は初めて気が付いたのだ、賑やかな雑踏に辺りを見回す、店からはいらっしやいらっしやいませの声、派手な浮かれた音楽、私は夕飯の買い物で賑わうたくさんの人達の中にいたのだ。

「夕子も物好きというかなあ」

半透明の夕さんが、溜息ついて、ガラスコップに活けた一輪の花を眺めた。

半透明の夕さん、十代後半くらいの綺麗な女の子である。半透明の夕さんはその名の通り、向こうが透けて見える、手を伸ばせば、手が擦り抜けてしまうのだ。幽霊とか座敷童子みたいなものかもしれないけれど、本人にはそういう自覚はないらしい。私は私だ、が、夕さんの自分自身に対するしっかりとした評価である。

うちの親が言うには、お産で私が生まれる時、母さんの横でしっかりしっかりと叫んでいたのが、うちの親達が夕さんを初めて見た時で、暢気な親だ、ガスの火を消し忘れてたときや、鍵を掛け忘れたときなんか、ちゃんと、夕さん、教えてくれるのよ、助かるわあ、なんてほざいているのだ。

私が子供の頃は、夕さんはお姉さんで、いまは、なんだか生意気な妹で、それは夕さんがずっとかわらないのに、私が大人になっていったからだけれど、多分、夕さんの中では、まだ、私は妹で、子供なのだろう。

父さんと喧嘩して家を出た時も、私について来てくれたのは、頼りない私が心配だったのだらうと思う。

「それ、なんて花だろう、百合かな」

「百合とは花の形は似ているけれど、葉の形が違う、この花、夕菅って云うんだ。夜に咲く月の色した花。朝にはしぼんでしまう」

夕さん、立ち上がって、窓から外を眺めた。

「見てごらん。上弦の月の色」

夕さんは実体がないので、体を突き出せば、上半身がカーテンも窓も擦り抜けてしまうけど、私はそうはいかない。カーテンを開け、外を眺める。中空には檸檬の色をした、上弦の月が浮かんでいた。真っ黒な画用紙をくりぬいた月、闇の中、冴え冴えと輝いている。

「月の輝きに回りの星が隠れてしまった」

夕さんが月を睨む。

「さて、月の角っこに、綱掛けて、何か引き上げようよというなら、これも縁というもの、少しばかり手伝ってやってもいいさ」

夕さんがにっと笑みを浮かべた。

「どういうこと。夕さん」

「夕子。しっかり晩御飯を食え。食ったら、出掛けよう」

「足が痛いよお、帰りたいよお」

私の泣き言に、きりきり歩くと夕さんが楽しそうに笑う。全くの闇の中、あの夕菅の花が仄かに月の色を足元に照らしていた。肌の感覚が微かに湿気を感じている、雨上がりなのだろうか。見上げて見ても、真っ黒な闇。

「夕さん、一緒に居てよ、何処にも行っちゃだよ」

「大丈夫。隣りずっと歩いてやるよ」

「ありがとう、夕さん」

「どういたしまして」

にかっと、夕さん、自信に満ちた笑顔で笑った。

私達は夕菅に導かれるまま歩いているのだ。夕菅を持つ私の右手が磁石に吸い寄せられるみたいに、歩く方角を決めて行く、私と夕さんはその後を付いて歩く。もう何時間も歩いているようにも思えるし、十分か十五分くらいにも思えるし、でもそうだ、足のたるさを思えば随分と歩いているに違いないと思う。

「ねえ、夕さん。いつか聞こうと思っていたこと、いま聞いて良いかな、多分、今じゃないと聞けないと思う」

「いいよ。歩いているだけじゃ退屈だ」

「あのね。夕さんは齢もとらないし、透けているし、手を伸ばせば擦り抜けてしまうし、私の幻覚、幻なのかなって思うこともある、でも、夕さんはお隣りさんとも仲がいいし、商店街のおばちゃん達とカラオケで歌っていたりする、近くの高校生に告白されて、ガキに興味はねえって断ったりもしていた。夕さんは何なの」

「確かにそれはご飯食いながら尋ねることのできる質問じゃないな」

夕さん、怒らずに真面目な顔をして答えてくれた。

「私は気づいた時、難産で苦しんでいる女性の隣りにいた、うんうん唸っていた。夕子を産もうとしている母さんの隣りだった。実は私にはそれ以前の記憶がない、まったくないんだ。だから、夕子の問いに答えることは難しい。ただね」

夕さんが私に向かって笑みを浮かべた。

「私は自分自身が何者かはわからないけど、これから、こうなりたいと思ったし、こうなろうとした。夕子のお姉さんにさ」

「私のお姉さん」

夕さんが照れたように笑って頷いた。

「だから、夕子は大人になってしまったけど、私にとっては今も妹だ。夕子がおばあちゃんになっても、この夕さんの妹だ」

夕さん、ふいっと笑顔を消して、視線を前に向けた。長い付き合いだ、わかっている、夕さんは案外、照れ屋なのだ。

「お姉ちゃん、ありがとう」

思い切って言ってみた。夕さん、聞こえない振りをしているけれど、ほんの少し笑った。そうだ、小さい頃はお姉ちゃんと呼んでいたんだ、いつからだったろう、父さんや母さんと同じように夕さんって呼び始めたのは。

夕さんの少し寂しそうな笑顔を思い出す。

「夕子。見えるか」

夕さんが囁いた。

月だ、空の高みに、夕菅と同じ色の上弦の月が浮かんでいた。微かな月明かりに辺りを見渡してみる。

月のかけら、月が欠けて落ちたように、夕菅の指し示す方向に光が灯る。

「あれは夕菅の花だ」

あの女の子が夕菅の花を片手に俯いていた。慌てて駆け寄る、女の子は信じられないようにぼおっと私の顔を見つめた。

「来たよ。さっきは花をありがとう」

急に女の子がごめんなさいと呟いた。

「え、どうして」

私の声に夕さんが呆れたように言う。

「ま、そうとしか言いようがないもんな」

夕さんが女の子の横にしゃがんで、地面を睨んでいた。

「随分、深いし、冷たそうだ。夕子、来てみる」

夕さんの隣り、しゃがんでみる。直径一メートルくらいの穴だ、まっくろで月の光も届かない。井戸のような、深い穴が地面に穿たれていた。

何か動いているような気がする。

「目を凝らしてじっと見てみる」

夕さんが穴の真ん中を睨みつけたまま、呟いた。腕だ、一本の子供の細い腕が円の中程、手を伸ばせば届くところに、下から生えていた。手が花の花弁のようにだらりと力無く、まるで風があるかのようにゆらゆら揺れている。

夕さん、ぎろっと女の子を睨みつけた、女の子が夕さんの視線を恐れるように俯く。私、ゆらゆら揺れるその手を両手でしっかりと握った。なんて冷たいんだ、氷、いや、そうじゃない、もっと深い、心にしみ込んでくる冷たさだ。

「ええっ、夕子、なんで掴むんだよ」

振り返った夕さんが驚いて声をあげた。

「え、あの。引っ張りあげたほうがいいかなあって、えっと、うん」

「その穴に落ちてしまったら、闇の中、無限に生きていなきゃらなくなる」

「その穴に子供が落ちているのなら、引き上げなきゃ」

私、おもいきり手に力を入れる、子供の手、引っ張りあげてやる、重い、なんて重いんだ、動かない。

夕さんが叫んだ。

「夕子、頭の中で引っ張りあげた時の子供の顔を思い浮かべろ。笑顔を思い浮かべるんだ」

夕さんの言うように、幸せそうに笑顔を浮かべる子供の顔を思い浮かべる。ああ、これ、私だ、私が子供の頃の顔だ、夕さんと一緒に公園で遊んだときの笑顔だ。

ふっと腕が軽くなった、小学生くらいの少年の体がふわっと空中に浮かんだ。手を離すとゆっくりと月に向かって浮かび上がっていく。

「夕子、しっかり。まだ、次がいるぞ」

夕さんの声に穴を見ると、多分、あれは女の子の手だ、ゆらゆら、揺れていた。ぎゅっと握りしめる、なんて冷たい手だ。持っているだけで体の中まで冷たくなっていく。

おもいきり、引っ張りあげた。幼稚園くらいの女の子だ。

次々と、もう、わけがわからないくらい、たくさんの子供達を引っ張りあげる、女の子、男の子、多分、小学校高学年くらいから、下は、臍の緒をつけた赤ん坊まで、皆、とても冷たい手だ、どんどん、私の手も冷たくかじかんでいく、でも、この穴が闇そのもので、こうやって手を差し出すなら、なんとか、この闇から子供達を引き出してやり

たい、母性だかなんだか、わからないけど、子供達が辛い思いをするのは嫌だ。

「夕子、この子が最後だ」

夕さんの声に手を見つめて、息を飲む。これは、生まれる前の子供の手だ、まだ、お母さんのお腹の中にいたはずの手だ。手を握って、もう片方の手を闇の中に差し込む。手が痛い、冷たいを遙かに越えて、手がちぎれてしまいそうだ。なんとか、両手で赤ん坊を引き上げる、手を離すと、ふわりと赤ん坊が浮かんだ。

「もう、限界だ」

背中から地面に倒れ込む。万歳の形で倒れてしまった。見上げると、いくつもの子供達が上限の月に向かって昇っていく。

「お疲れさま」

夕さんが少し笑った。

「夕さん。あの子達、どうなるんだろう」

「わからない。でも、闇の中、膝を抱えて震え続けているよりはずっとましだろう」
夕さん、ほっと息を漏らすと、私の横に座った。

「ね、あの子達っていったい何だったんだろう」

「親からの虐待で殺された子供達だ、この穴はそんな子供達を飲み込んでいたんだろう、こんな穴はいくつもあるのさ」

しばらくして、体を起こすと、さっきの穴は消えていた。女の子だ、女の子が正座して俯いている。足引きずりながら、女の子の前へ這う。

ごめんなさい、俯いたまま、女の子が呟いた。

「謝ることはないよ。お姉ちゃん、ちょっとばてただけさ」

手が、と女の子が言いよどんだ。どうしてだろう、私、女の子の手を取って、私の頬にくっつける。

「ほら、手は冷たくなったけど、ほっぺたは暖かいぞ」

驚いたように女の子が顔を上げた、でも、泣き出しそうな笑顔を浮かべてくれた、そして、かき消すようにその姿が消える。

「え、あ、ど、何処に行ったの」

「下、見てみろ」

夕さんが指さす先、小さな女の子の人形が転がっていた。

「服装や髪型、同じだろう」

私、人形を拾い上げて、どうしてだろう、しっかりと抱きしめた。なんでだ、泣きそうになる。

「少し明るくなってきた」

辺りが見える、夕菅の花はしぼんで、朝日が昇る前の、朝まだき、うっすらと青色に辺りが染まる時間だ。

「ここって」

「近所の河原だ。歩いて十五分ってとこだな」

「うん。見覚えある。あそこの橋、毎日、歩いているよ」

「徹夜だな」

「うん、お肌に悪いなあ」

「ついでに言うと、夕子、今日は仕事、休みじゃない。ま、頑張ってくれ」

あああ、なんだか、溜息をついてしまった。

「帰って、ちょっとだけご飯を食べてから、仕事に行くよ。ね、夕さん、この子、連れて帰っていいかなあ」

「そのままにすれば、水に流され、ゴミ扱いだ。いいんじゃないかな、連れて帰って」
夕さん、そっと笑みを浮かべた。ゆっくりと立ち上がる、朝の空気が気持ちいい。川風が上流からゆっくりと流れてくる。

「夕子。同じようにさ、また、子供の手を引き上げなければならなくなったらどうする」

夕さんの言葉に、自分の両手を見つめた。少し、両手に暖かさが戻ってきたように思う。あの冷たさはなんだったんだろう。氷を掴むなんてものじゃない、心に直接襲ってくるような。あれは、あの子達の絶望や恨みや怒りなのか。ううん、そうじゃない。あれは、願いだ。生きていたい、笑顔を浮かべたい、そんな切な、そして単純すぎるほどの強い願いなんだと思う。

「あの子、ごめんなさい、って言っただろう」

「うん」

「今までにもたくさん大人の大人に救って欲しいと夕菅を渡していただろうと思う。全部、だめだったんだろう、だから、あの子は夕子が来たことに驚きと、胸が一杯になって、ごめんなさいの一言が精一杯だったんだと思うよ」

夕さんの言葉にじっと腕の中の人形を見つめた。薄汚れてしまっているけれど、とても可愛い人形だ。この子も辛い思いをしたのかな、こんな小さな人形なのに。

「泣いているのか」

「ううん、泣いていないし、泣かない」

ぎゅっと歯を食いしばった。

「こういうとき、絶対に泣いたらだめなんだと思う。涙と一緒に思いが流れて行ってし

まうから」

夕さんも立ち上がると、にかっと子供のように笑った。

「夕子、しっかりしたな」

「うん」

どうしてだろう、素直に頷いた。多分、私は、次も手を掴むだろう。逃げずに、知らぬ振りせずに、手を掴んで、引き上げる。

ふと、気がついた。夕さんは私を引き上げてくれたのかもしれない。なんだか、不思議にそう思えて仕方がない。

「お姉ちゃん」

「いいよ、夕さんで。なんか照れる」

「ううん、いまはお姉ちゃんって呼ぶ。ありがとう、お姉ちゃん」

夕さん、照れ笑いを浮かべて、顔をそむけた。

「どういたしまして」

終わり

「夕さん」の権利とか、そういうことにつきまして。

「夕さん」の権利者と致しまして、ご自由にお読みいただいて結構です、この「ご自由」を展開いたしますと、お一人でお読みになるのも、たくさんの人たちの前でお読みになるのも御自由です。また、あなた様とたくさんの人たちの間に金銭が関わってようと、いまいにご自由にお読みいただけます、録音をCDやダウンロード販売されて、利益を得られるのもご自由です。私になんらかの利益を供与する必要はございません。また、「夕さん」を朗読なさったことを、私に連絡する必要は特にございません。改変につきましては、この方が読みやすいや、この方が納得しやすいと思われる場合は、内容を変えていただいても結構です。ただ、そのときは、改変者に敬意を込める意味で、ちらし等を作る場合、原案者 物部俊之と表記してください。今後、「夕さん」を少しずつ手直ししていくかもしれません、最新情報は <http://monobe.info/book/index.cgi> にてご案内を致します。